

まなびのプラン(学力向上計画)

令和4(2022)－令和12(2030)年度

令和4(2022)年1月 第1期 策定

令和7(2025)年3月 第2期 改訂



も く じ

第1章 基本的な考え方	1
1 計画の背景	1
2 計画の位置づけ	3
3 計画の期間	3
第2章 現状と課題の整理	4
1 現状の把握	4
2 学力向上 3ヶ年計画から導き出された成果	12
3 学力向上 3ヶ年計画から導き出された課題	12
4 全国学力・学習状況調査等の分析から導き出された課題	12
第3章 本計画の目標	13
1 本市の児童生徒に身につけさせたい資質・能力	13
2 計画の取組	15
第4章 目標に基づく施策	15
1 組織的な学校の取組みの推進	15
2 子どもが学びの主体になる授業づくり(小中学校 9年間を通して)	15
3 家庭での教育力の向上、生活習慣の改善	15
第5章 計画推進のための指標と評価	16
1 計画推進のサイクル	16
2 計画期間中における指標	16
第6章 第1期の振り返りと第2期の具体的取組みについて	17
1 第1期計画(令和4年度から令和6年度)の結果	17
2 第1期の総括	23
3 第2期の取組について	25
巻末資料1 第2期概要版	28
巻末資料2 まなびのプラン(R4~R12)指標	29

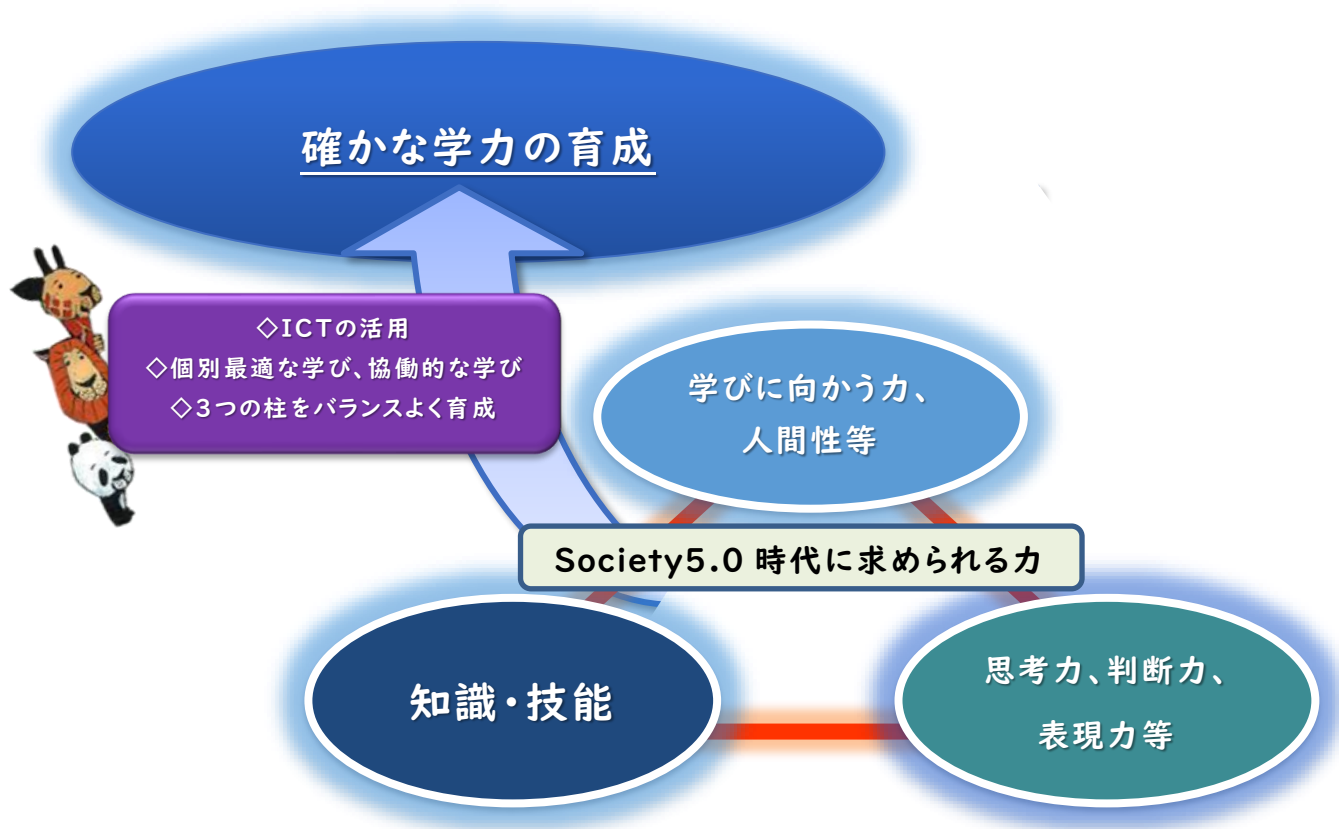
1 計画の背景

今の子どもたちが成人して社会で活躍する時代は、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。このような時代にあって、平成29年文部科学省告示の学習指導要領では、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている」と記されている。

本市では、子どもたちの確かな学力の育成に向けて、平成24年度に第1期学力向上3ヶ年計画を策定し、授業改善、家庭学習の習慣化・生活習慣の改善、フォローアップ対策、小中連携・一貫教育を4つの柱として、学力向上対策プロジェクトチームを中心に取組を進めてきた。また、第2期学力向上3ヶ年計画では、特に授業改善・家庭学習の取組に重点を置き、第3期学力向上3ヶ年計画では、学習指導要領の改訂にともない、子ども主体の授業づくり、指導と評価の一体化に重点を置くとともに、学習者用タブレットPCの配備等学習環境の整備を行い、全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現に向けて取組を進めてきた。

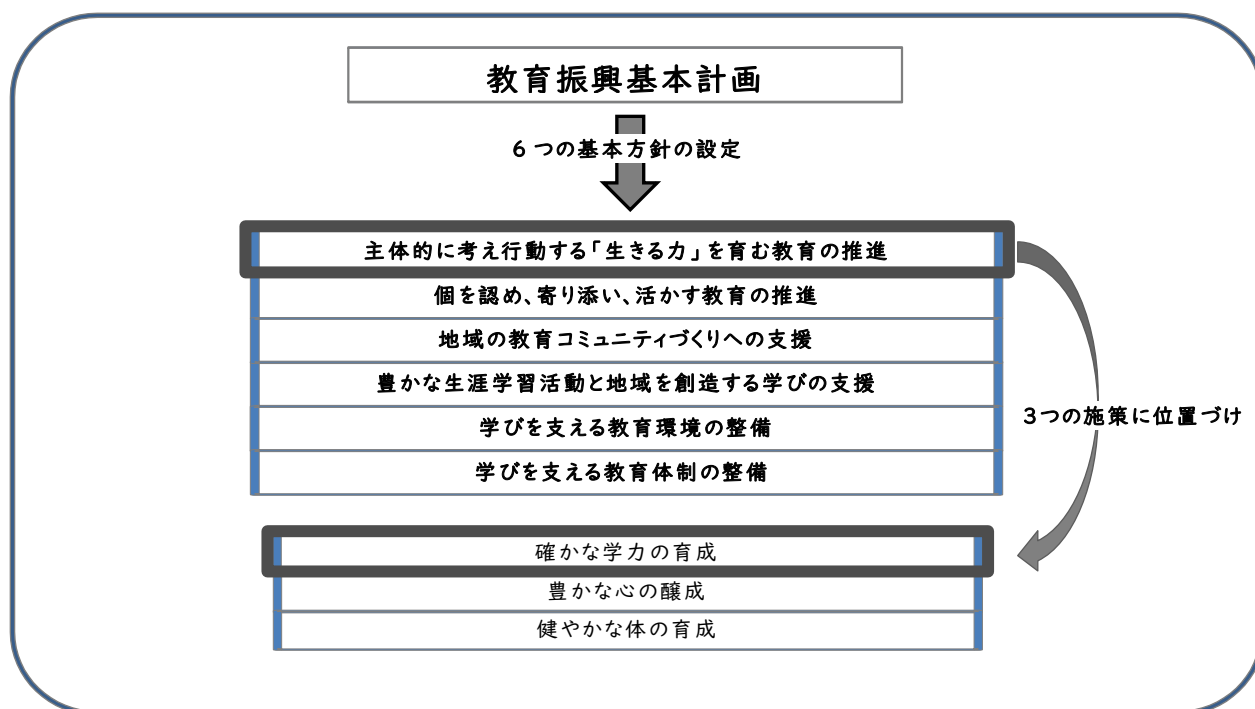
第3期までの計画に基づき、学力向上担当者会で、四條畷市内小中学校における学力向上の取組の内容と実践が共有化されたことで、市域に広まり、令和3年度実施の「すくすくウォッチ」では市の平均が大阪府の平均を上回る（第5学年国語は府の平均正答率を1とした時、四條畷市は1.004）などの成果がみられた。一方、令和3年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査では「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」などに課題があった。今後は、各教科における「問題発見、問題解決」に至る過程を重視し、主体的に学習に取り組む態度の涵養をめざすことや、学習を振り返り「前の学び」「他の学び」を生かしたつながりのある学習活動を実施することで、自己調整力や自己認識力（メタ認知）の育成をめざす必要がある。また、これまでの計画で重点としていた組織的な取組、子ども主体の授業づくり、家庭の教育力の向上についても、リーフレット等にして各学校、家庭に示し、継続していく。

本計画の実施により、Society5.0時代の到来において、GIGAスクール構想に係る学習者用タブレットPCを含むICTの活用、個別最適な学び及び協働的な学びの実現、教科横断的な視点で編成された教育課程（カリキュラム・マネジメント）を通して、育成をめざす資質・能力の三つの柱（生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）をバランス良く育成していく。



2 計画の位置づけ

本計画は、上位計画である「四條畷市教育振興基本計画」（令和4年（2022年）1月策定）の基本方針Ⅰ「主体的に考え行動する『生きる力』を育む教育の推進」を実現するための施策「確かな学力の育成」の推進計画として位置づける。



3 計画の期間

本計画は、次の学習指導要領改訂までの期間とし、3年ごとに見直しを図る。

計画の期間

	令和4年 (2022)	令和5年 (2023)	令和6年 (2024)	令和7年 (2025)	令和8年 (2026)	令和9年 (2027)	令和10年 (2028)	令和11年 (2029)	令和12年 (2030)
第1期									
第2期									
第3期							学習指導要領改訂（想定）		

第2章 現状と課題の整理

Ⅰ 現状の把握

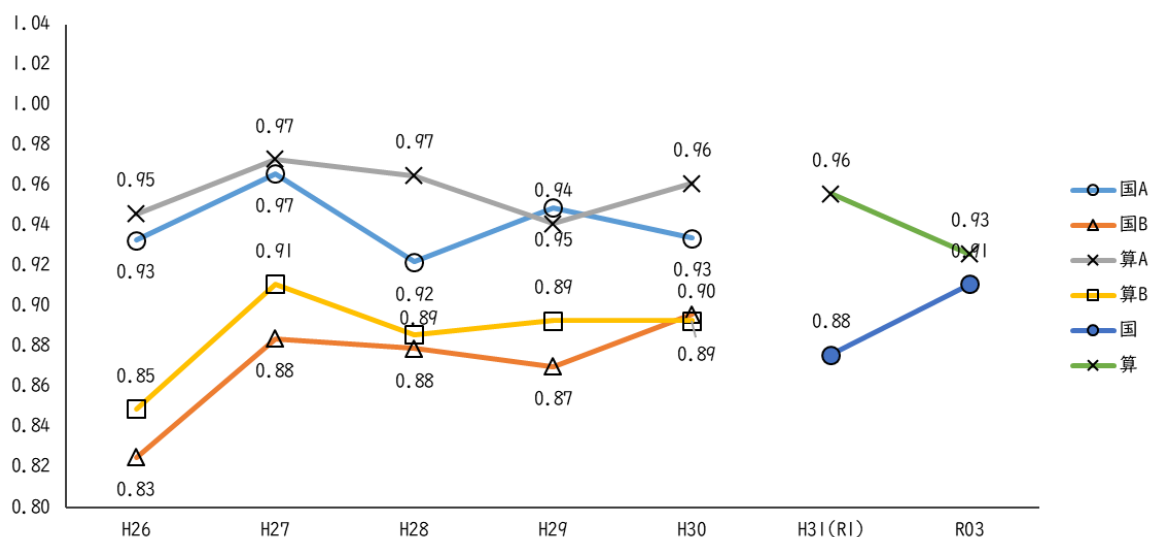
第3期学力向上3ヶ年計画では、市域全体、各小中学校の取組の成果と課題を明確にするため、客観的な指標を位置づけ、計画的な取組につなげた。指標としては、(1) 学習内容の定着に関するもの、(2) 子どもの学習状況・生活習慣に関するもの、(3) 学校の取組状況に関するものの大きく3つを設定し、実施した。実態は以下のとおりである。

(以下の図は、上段：小学校、下段：中学校で表記)

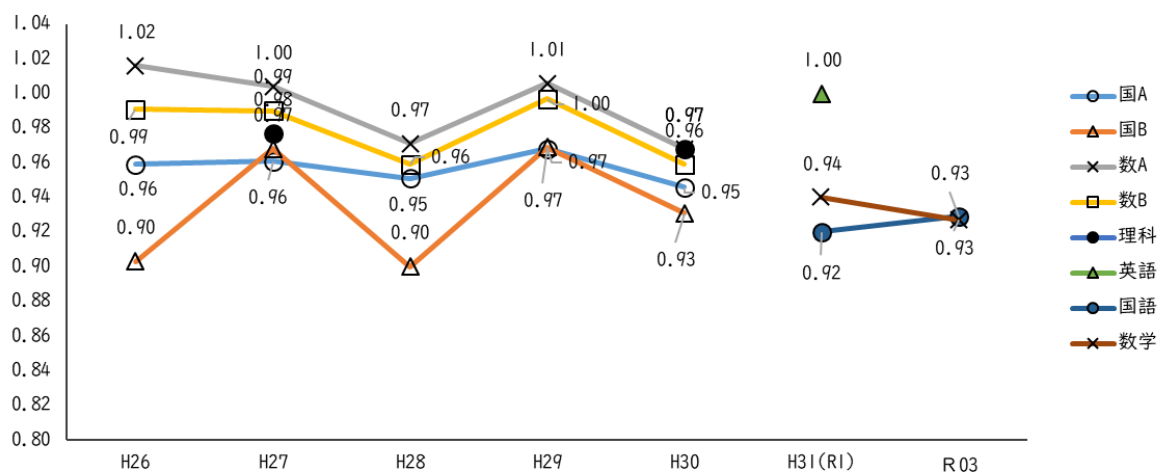
(1) 学習内容の定着に関するもの

① 全国学力・学習状況調査

【各教科の平均正答率対全国(公立)比の経年変化(全国平均を1としたときの割合)】

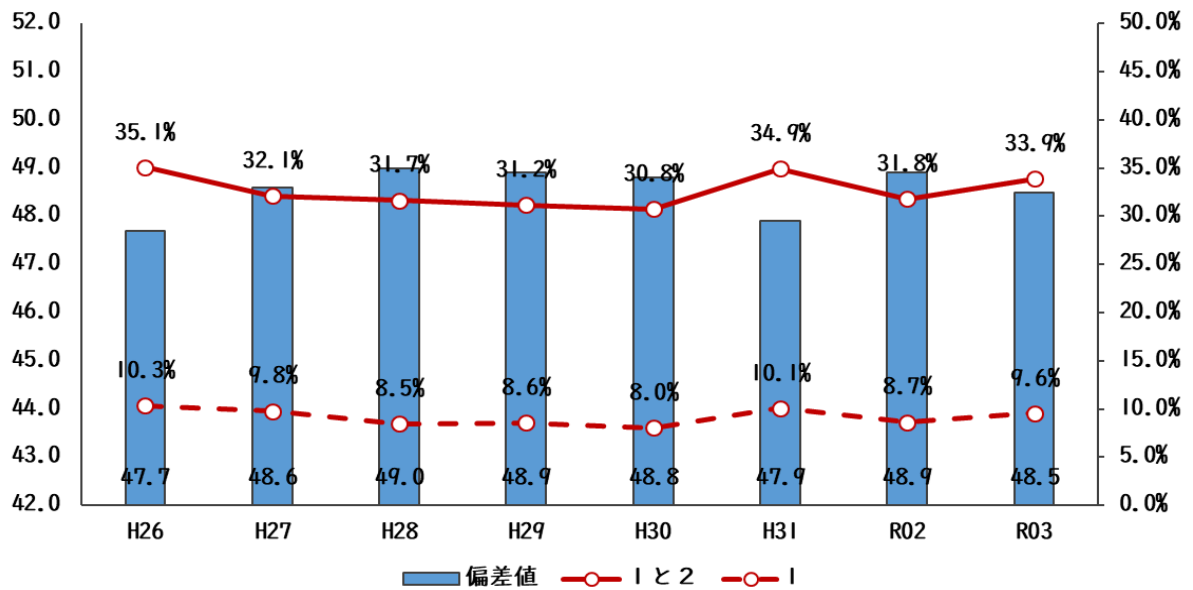


【各教科の平均正答率対全国(公立)比の経年変化(全国平均を1としたときの割合)】

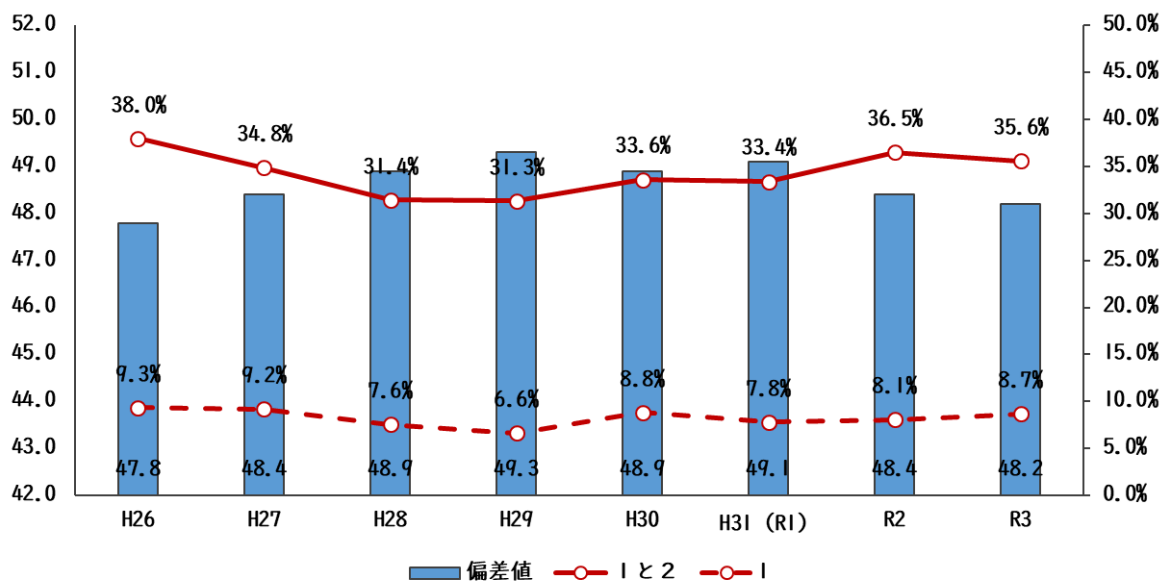


②標準学力調査

【教科総合の偏差値及び５段階分布の低位層の割合の経年変化】



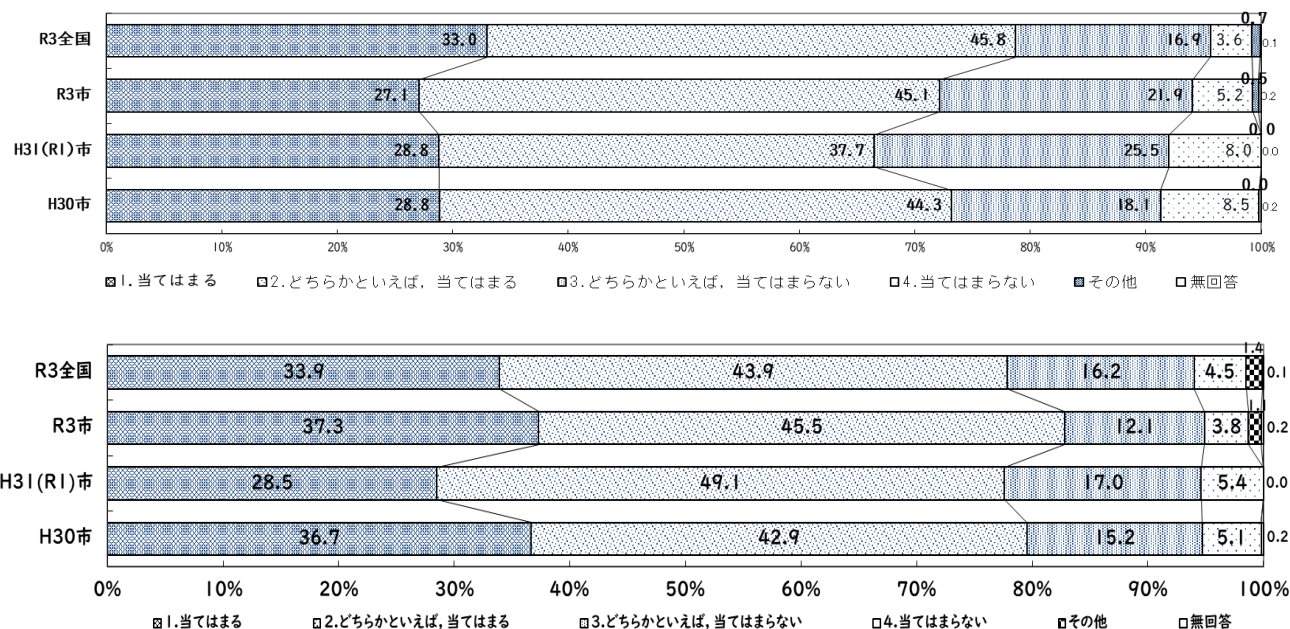
【教科総合の偏差値及び５段階分布の低位層の割合の経年変化】



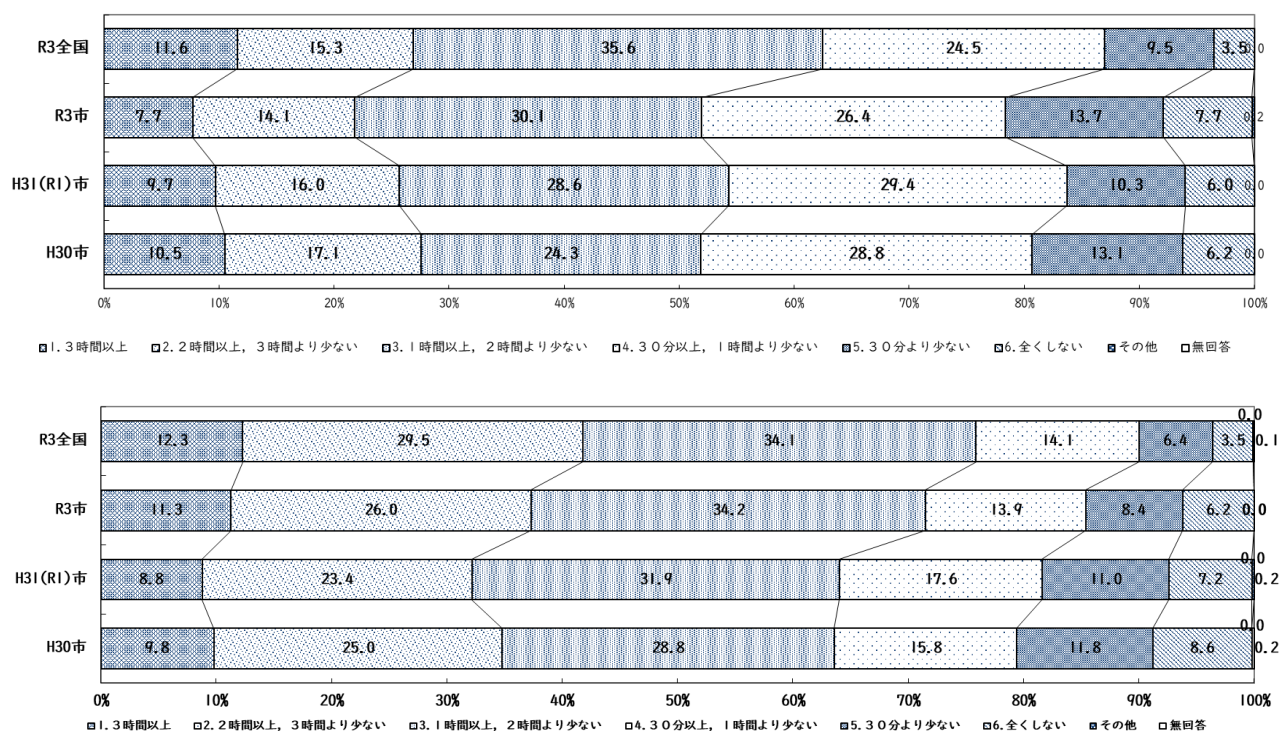
(2) 子どもの学習状況・生活習慣に関するもの

① 学びに向かう力（全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙における回答状況 以下：全国学調質問紙）

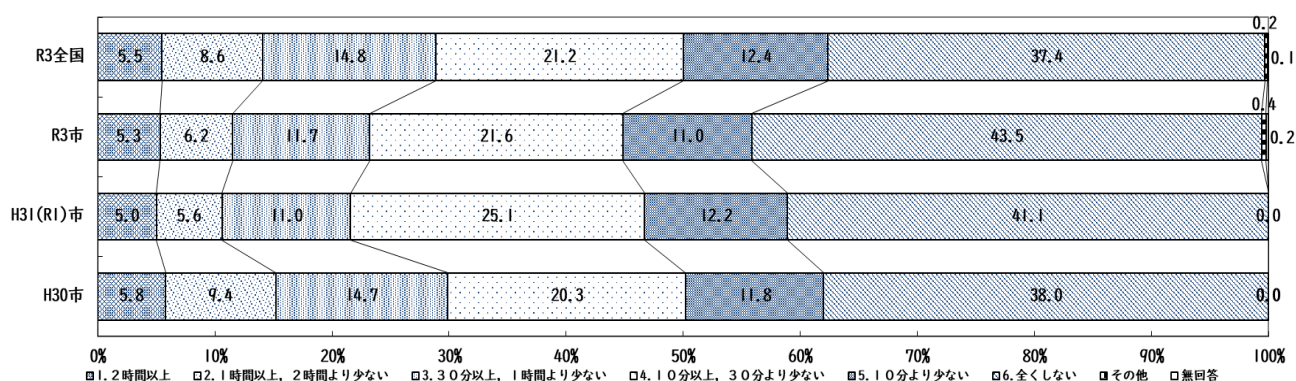
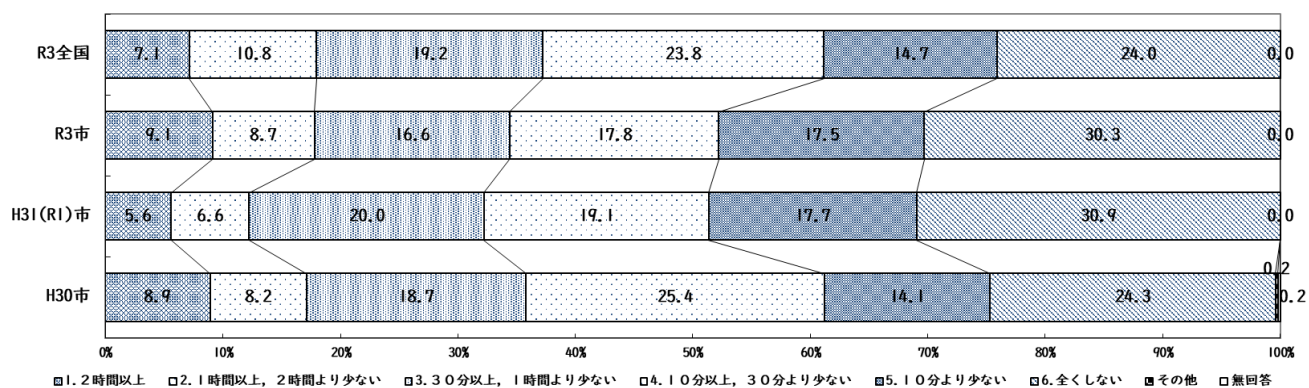
（i）学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたり
 することができていると思いますか



（ii）学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの
 時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている
 時間も含む）



(iii) 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）

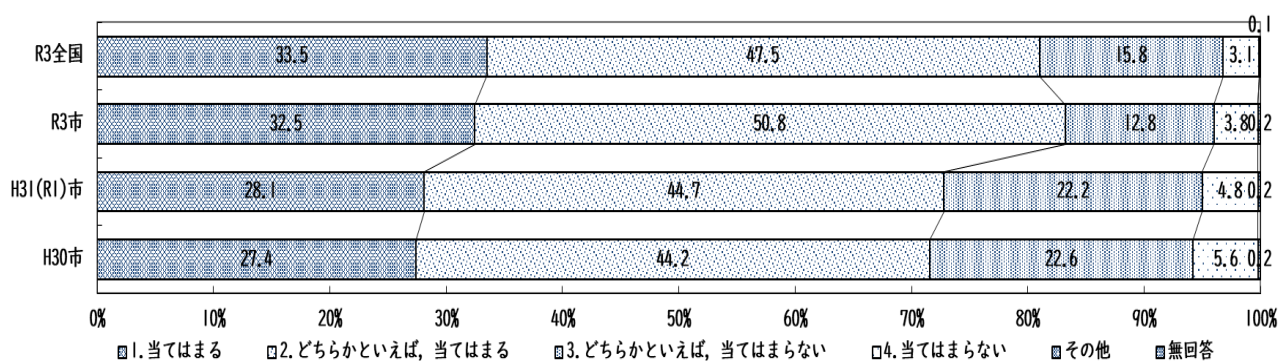


②活用できる知識・技能

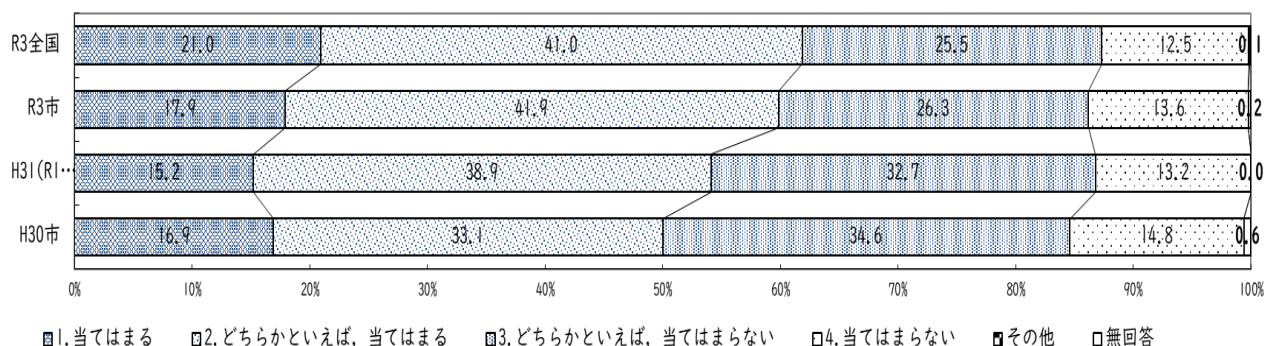
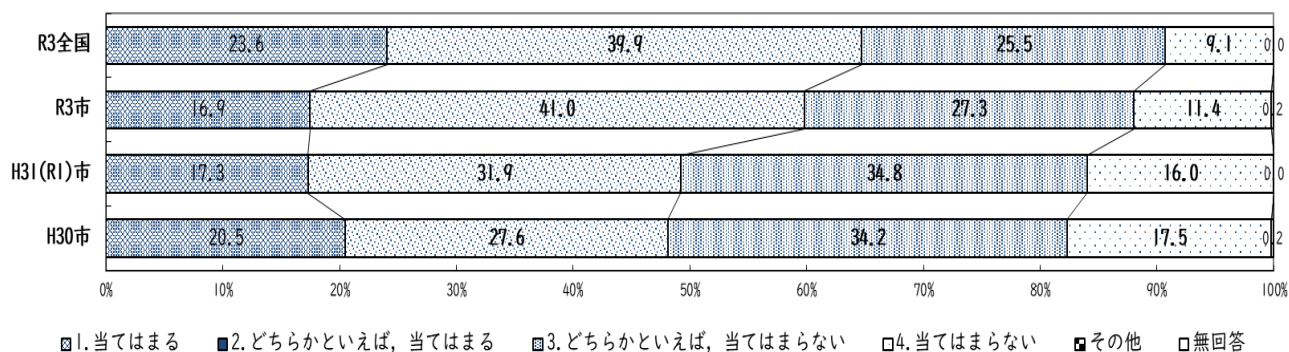
指標が、(1) 学習内容の定着に関するものと同じの為省略

③考え判断し表現する力（全国学調質問紙）

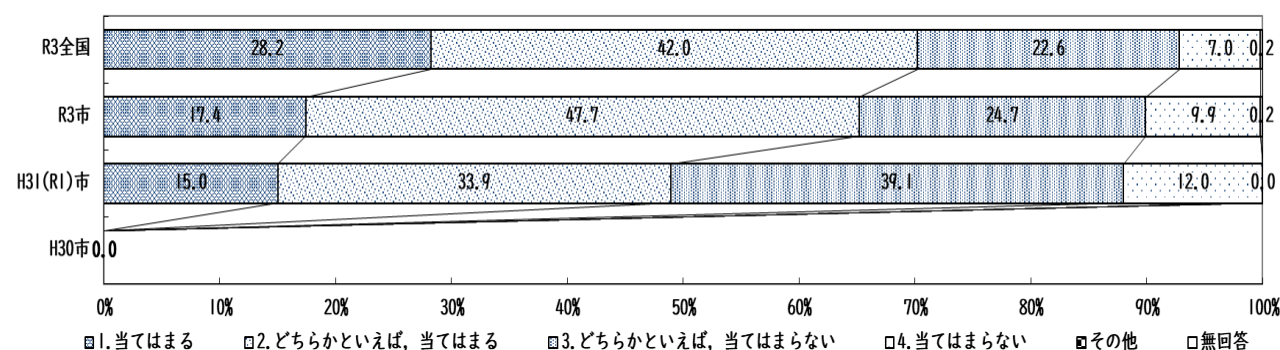
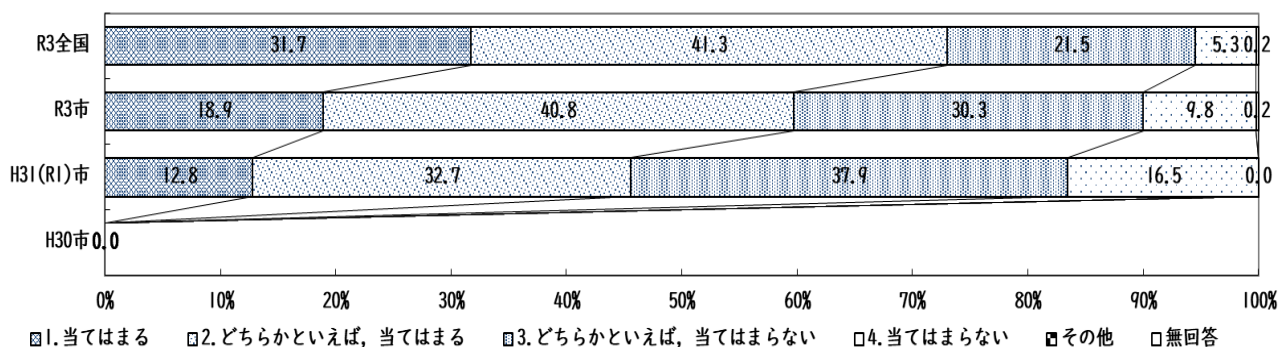
（i）今までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分で取り組んでいたと思いますか



（ii）今までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文書、話の組立てなどを工夫していましたか



(iii) 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか

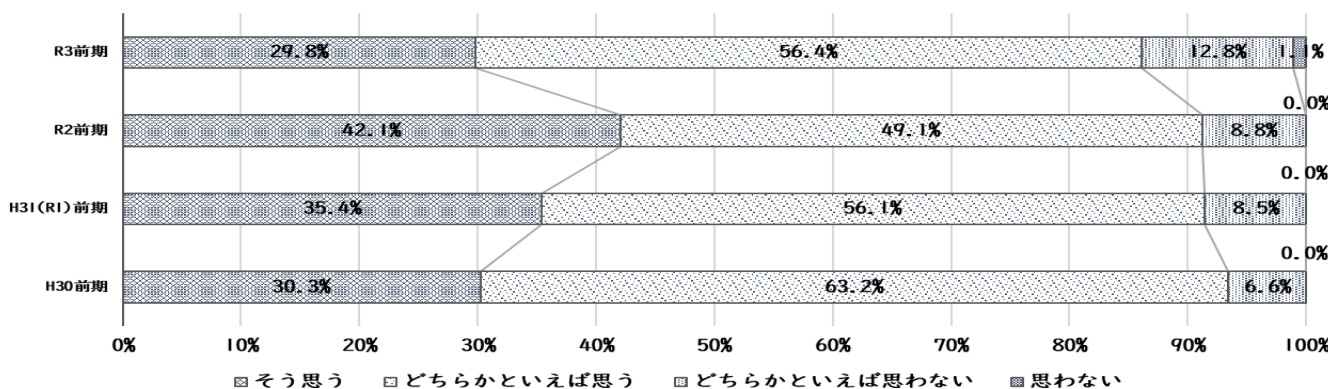
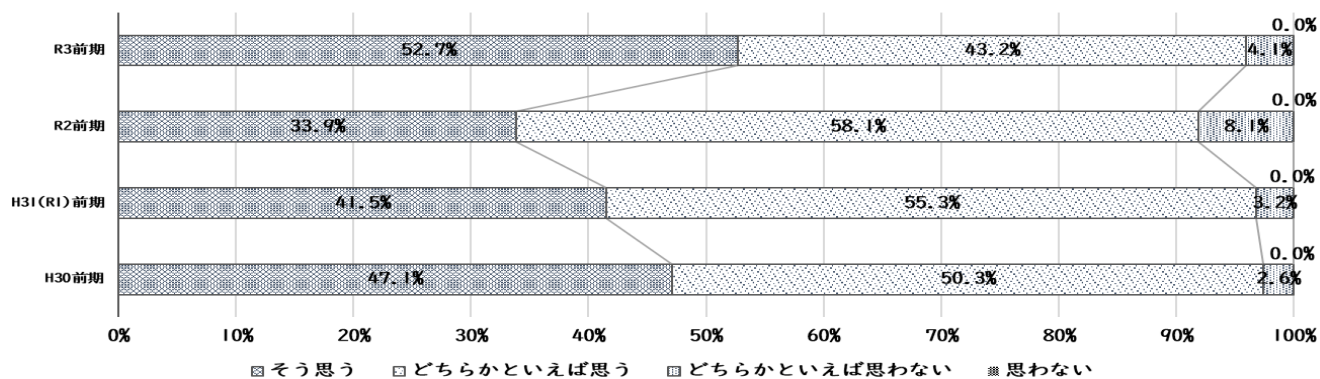


(3) 学校の取組状況に関するもの

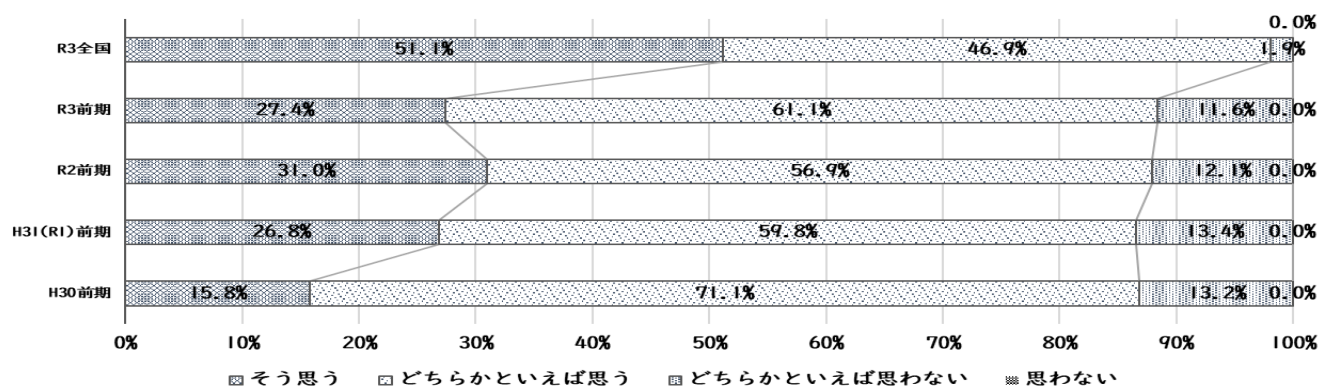
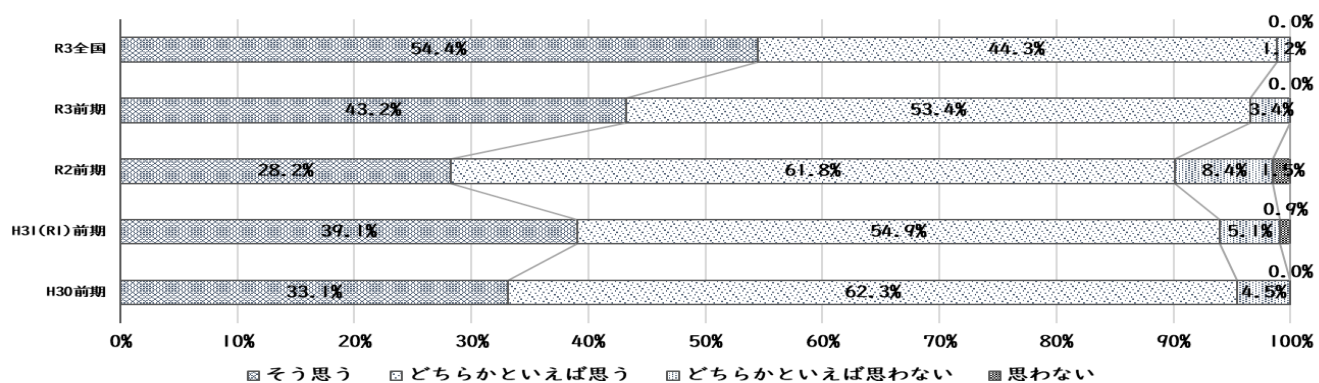
①組織的な取組

(i) 「学校全体の学力や課題について、全教職員の間で共有していますか」

(市独自の教職員アンケート)

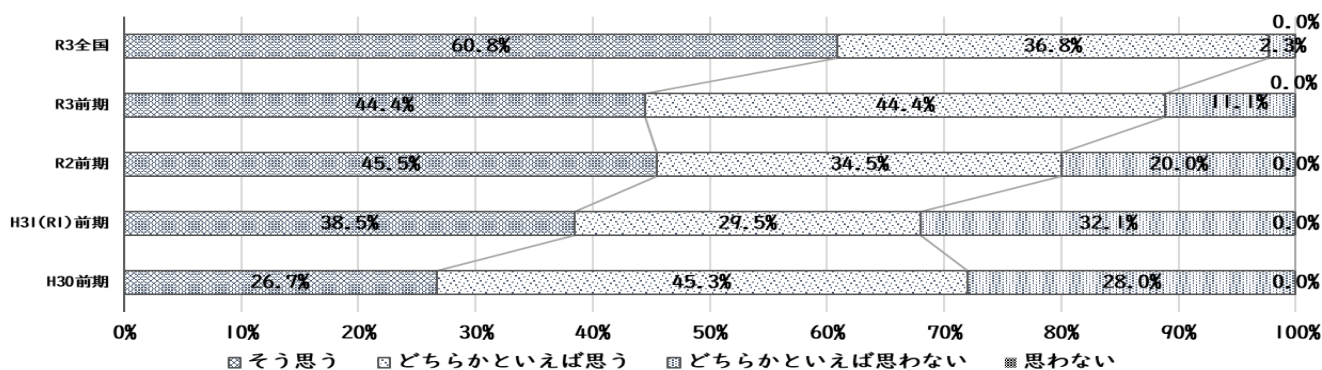
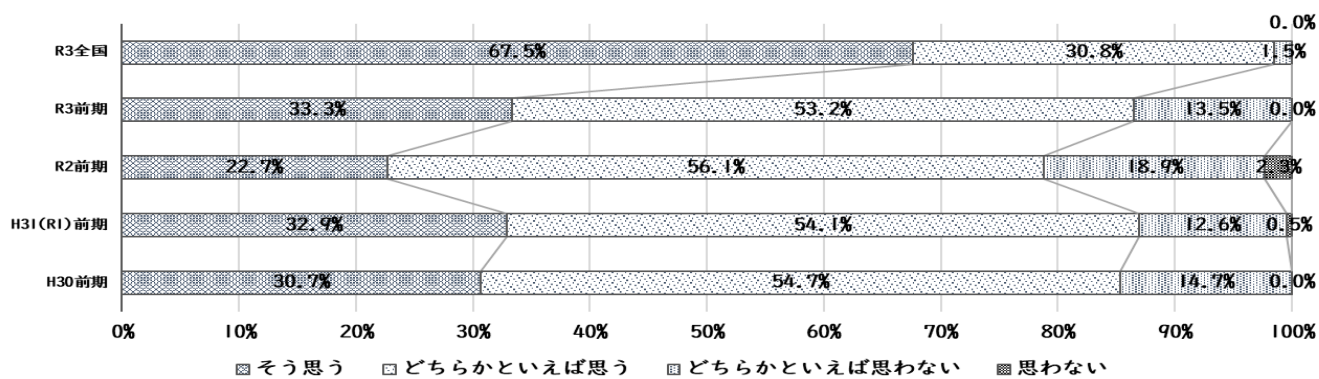


(ii)「学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいますか」(全国学調質問紙、市独自の教職員アンケート)

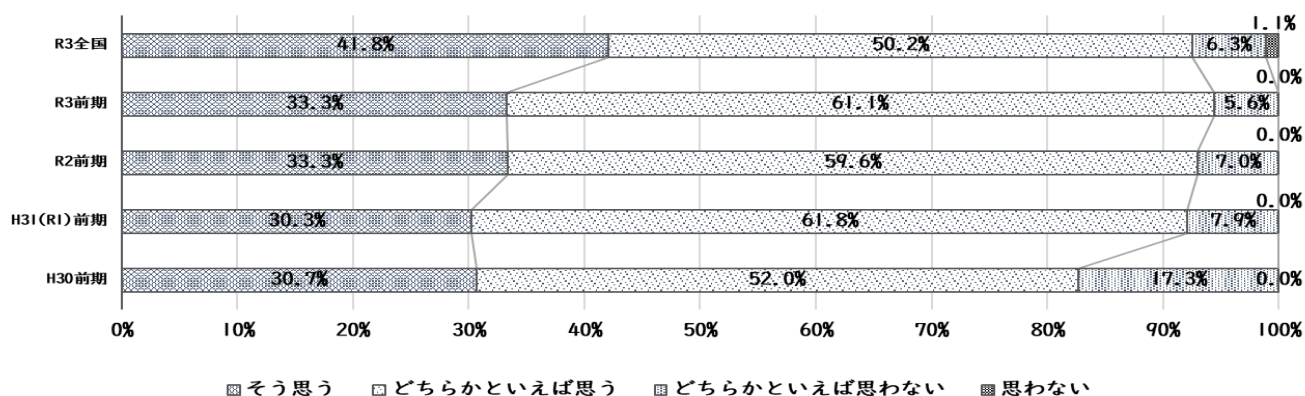
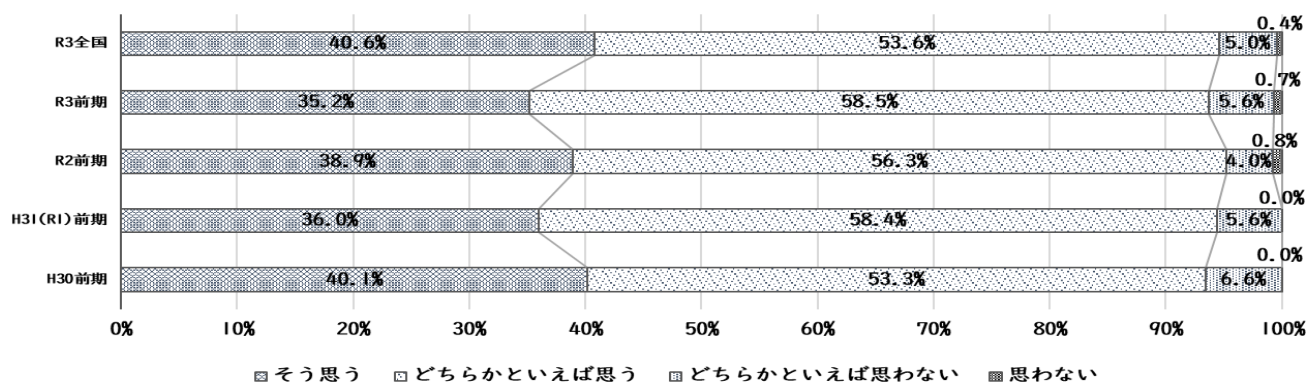


②授業改善

(i)「授業の最後に学習したことを振り返る活動を計画的に取り入れましたか」(全国学調質問紙、市独自の教職員アンケート)



(ii)「特別支援教育の視点から、指導上の工夫(板書や説明の仕方、教材の工夫など)を行いましたか」(全国学調質問紙、市独自の教職員アンケート)



2 学力向上3ヶ年計画から導き出された成果

- ・学びに向かう力の涵養。話し合う活動を通して、考えを深めたり、広げたりする協働的な学びの定着。中学校では、全国平均を上回り、小学校も改善傾向（p.6（2）①（i）より）
- ・考え判断し表現する力の育成。考えを発表するときに、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫することを大切にした授業改善（p.8（2）③（ii）より）

3 学力向上3ヶ年計画から導き出された課題

- ・低位層の割合、基礎的、基本的な知識・技能の習得（p.4-5（1）①②より）
- ・家庭での学習時間（p.6-7（2）①（ii）（iii）より）
- ・課題の設定、情報収集や整理、調査内容の報告、発表など課題解決に向けた主体的な学びの実践（p.8-9（2）③（i）（iii）より）
- ・相手（読む側、聞く側）に伝えることを意識した表現の工夫（p.8（2）③（ii）より）
- ・学習したことを振り返る活動の計画的な実施（p.10（3）②（i）より）

4 全国学力・学習状況調査等の分析から導き出された課題

- ・主体的に学習に取り組む態度の涵養、各教科における「問題発見、問題解決」過程を重視した授業改善
- ・自己調整力や自己認識力の育成、学習を計画することと振り返る活動の充実
- ・朝食摂取状況や、就寝時刻など生活習慣の改善

第3章 本計画の目標

Ⅰ 本市の児童生徒に身につけさせたい資質・能力

これからの社会を生きる児童生徒に対し、「社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにすることや、複雑化、多様化した現代社会の課題に対して、主体的な学びや多様な人々との協働を通じ、その課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと」が求められている。（平成28年中央教育審議会答申）

また、令和4年度を起点として、本市教育の最上位計画教育振興基本計画では、「『みんなの学びが叶うまち』～生涯 学び 夢 挑戦～」を基本理念とし、すべての人々が個性や創造性を発揮し、夢や可能性に挑戦しながら協働し、学びつづけることができる環境づくりが示されている。

このような社会を生きる児童生徒の確かな学力を育むため、学習指導要領では、学校教育において育成すべき資質・能力を次の3つの柱で整理している。

- ① 生きて働く知識・技能の習得
- ② 未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成
- ③ 学びに向かう力・人間性等の涵養

これら3つの柱で整理された資質・能力の伸長を測るため、令和7年度からの第2期に向けて目標指標を見直した。

項目	目標指標
知識・技能の 習得	・全国学力・学習状況調査における標準化得点の対全国比Ⅰ ・質問紙調査による「授業で学んだことを次の学習や他の教科で役立てている」への肯定的回答割合の増加
思考力・判断 力・表現力等 の育成	・全国学力・学習状況調査における記述式問題の正答率の対全国比Ⅰ ・教職員アンケートにおける「児童生徒に互いの意見・考え方・作品などを共有させたり、比較検討させたりするために、コンピューターや提示装置などを活用して児童生徒の意見などを効果的に提示していますか。」への肯定的回答割合の増加

学びに向かう 力・人間性等 の涵養	・児童生徒アンケートにおける「ICT 機器を活用することで、進んで学習するようになりましたか。」への肯定的回答割合の増加 ・全国学力・学習状況調査における「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1 日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」への 30 分未満と回答した割合の減少
----------------------------------	---

2 計画の取組

児童生徒	<u>「主体的に考え行動する」資質・能力の育成</u> 小中学校における9ヶ年の教育活動を通して、確かな学力を身に付け、「主体的に考え行動する」資質・能力を育む。学習の計画を立てたり、今までの学習を振り返ったりする活動を行うことで、よりよく学ぼうとする態度を養う。
教職員	<u>確かな学力を育む指導力の向上</u> 市内各小中学校において、教職員の指導力向上に係る事業（指導力向上推進事務）を活用し、学識経験者等を招聘し、研究、修養に取り組む。 四條畷市授業づくりスタンダードに基づく授業の実施や、授業の改善・充実の好事例を共有、発信することで、授業の質の向上に努め、主体的・対話的で深い学びが実現されるように授業力の向上を図る。 市内各小中学校の担当者で構成する学力向上担当者会を開催し、四條畷市「確かな学びを育む学校づくり」スタンダードに基づく各校の学力向上の取組を共有し、校内での好事例の発信、定着による学力向上を推進する。

第4章 目標に基づく施策

本計画の目標を達成するため、次の3つの取組を推進する。また、市内小中学校の好事例などを収集し、内容の充実を図る。

1 組織的な学校の取組の推進

「四條畷市『確かな学びを育む学校づくり』スタンダード」に基づく学力向上の推進

- (1) 校内の研修体制の充実、学力に係る組織力及び運営力の向上
- (2) 学習環境の整備、学び方の習得及び自主的、自発的な学習の促進

※フォローアップの取組（きめ細やかな学習指導、放課後学習の場の設定など）



2 子どもが学びの主体になる授業づくり(小中学校9年間を通して)

「四條畷市 授業づくりスタンダード」に基づく授業改善

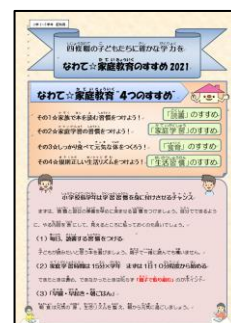
- (1) 「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点からの授業改善
- (2) 指導と評価の一体化
- (3) 学習過程の重視（問題発見、問題解決方法の検討、実施、情報収集、振り返りと評価など）



3 家庭での教育力の向上、生活習慣の改善

「なわて☆家庭教育のすすめ」などを通し保護者、地域と協働推進

- (1) 学校教育計画に基づいた「生活指導」「保健指導」通した改善の推進
- (2) 地域、家庭、学校の三位一体となった取組の充実



第5章 計画推進のための指標と評価

1 計画推進のサイクル

本計画を着実に推進するにあたり、PDCAのマネジメントサイクルによる進捗管理を行う。成果目標の達成度合いは、毎年度進捗管理を行い、令和6(2024)年度、令和7(2025)年度に評価を実施する。

評価方法としては、第3章の「1 本市の児童生徒に身につけさせたい資質・能力」において設定した指標及び「2 計画の取組」に基づき、学力調査と本市及び文部科学省が実施するアンケート調査等で評価する。本計画は、次期学習指導要領改訂までの期間を見据えて策定しているが、国の施策の変化や、時代のニーズ、本市の学力及び財政状況等を踏まえ、必要に応じて見直しを行う。

2 計画期間中における指標（実績は、前期の市独自児童生徒教職員アンケートによる）

（1）まなびのプラン（R4～R12）の指標

巻末資料2 別紙『まなびのプラン（R4～R12）指標』のとおり（P28～P29）

（2）まなびのプラン第2期（R7～R9）の指標

巻末資料2 別紙『まなびのプラン第2期（R6～R9）指標』のとおり（P30）

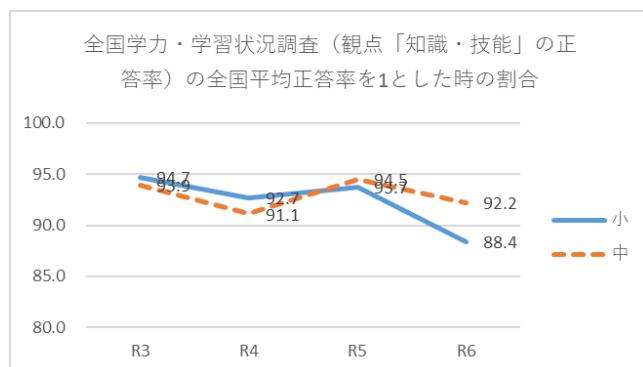
第6章 第1期の振り返りと第2期の具体的取組について

Ⅰ 第1期計画（令和4年度から令和6年度）の結果

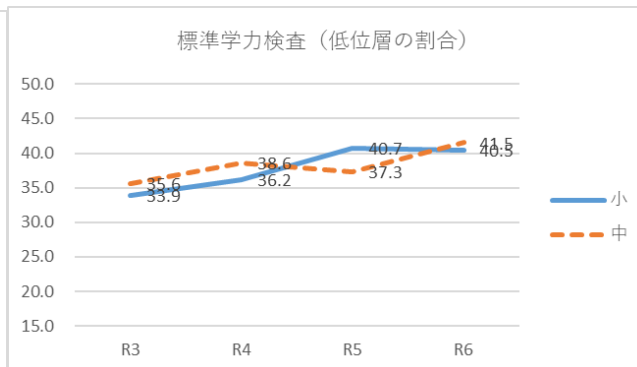
（Ⅰ）「知識・技能の習得」について

①経年変化

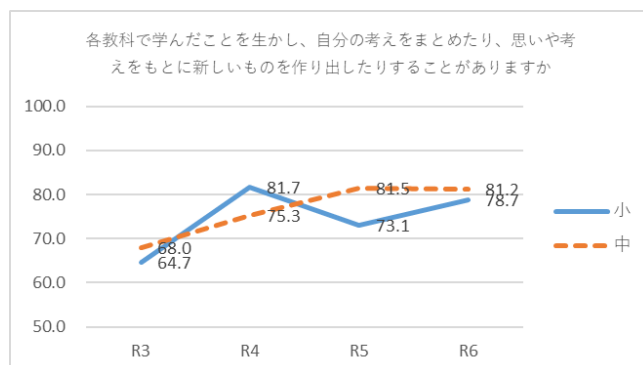
ア 全国学調「知識・技能」正答率



イ NRT 低位層の割合



ウ 考えをまとめたり新しいものを作り出したりする



②成果

令和3年度と比較すると、小中学校ともに「各教科で学んだことを活かし、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりすることがある」と回答した割合は増加した（ウ）。

③課題

令和3年度と比較すると、小中学校ともに全国学力・学習状況調査の観点「知識・技能」を問う問題について、正答率は全国との差が広がった（ア）。また、標準学力検査における低位層（5段階評定における評定1、2の児童生徒の層）の割合も増加した（イ）。

④小括

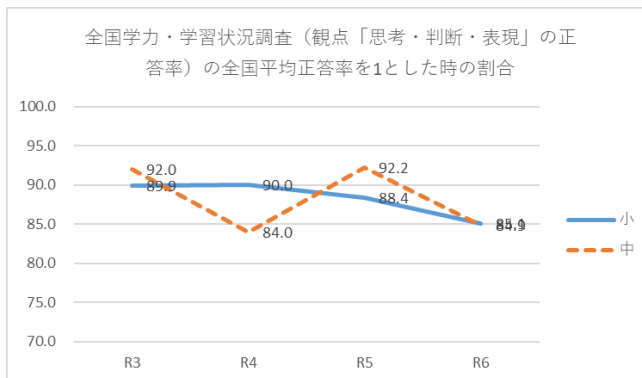
令和3年度と比較すると、「知識・技能の習得」については、各校の授業工夫により、児童生徒が習得した知識・技能を活用する学習場面は増加している一方、低位層が増

加した。第２期では、学習が苦手な児童生徒への支援を充実させ、低位層の減少を図る必要がある。

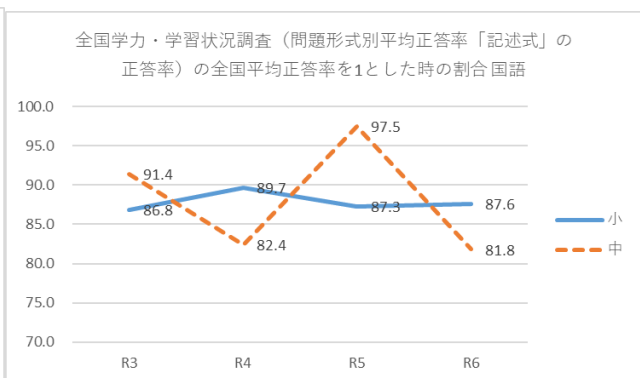
(2)「思考力・判断力・表現力等の育成」について

①経年変化

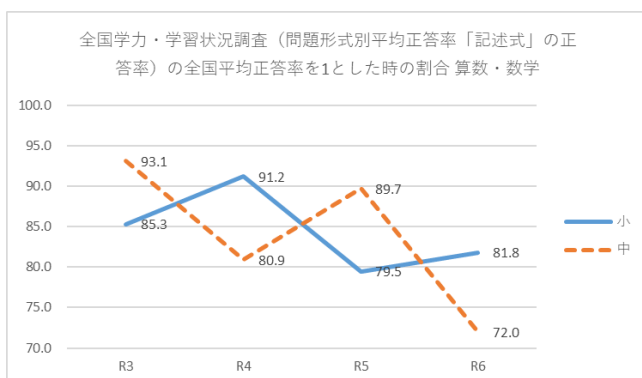
ア 全国学調「思考判断表現」正答率



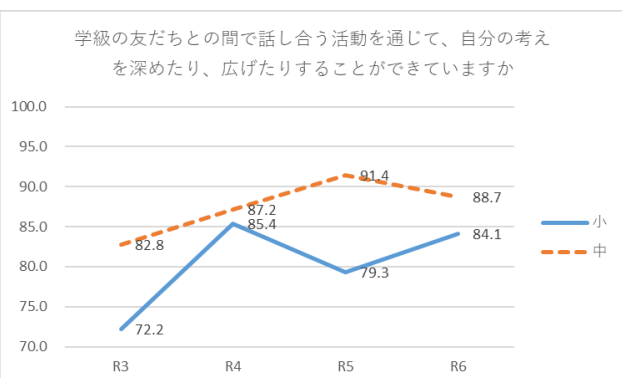
イ 記述式正答率（国語）



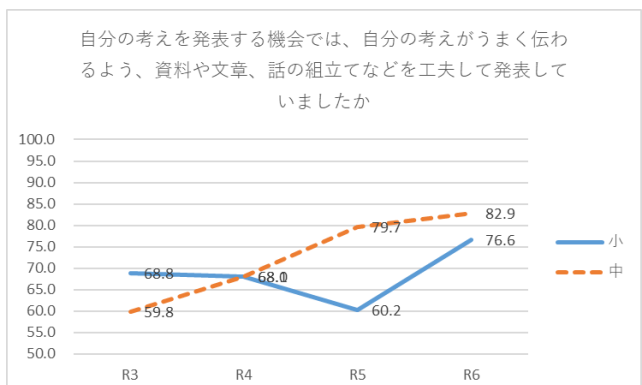
ウ 記述式正答率（算数・数学）



エ 自分の考えを深めたり、広げたりする



オ 資料や文章、話の組み立てを工夫する



②成果

令和３年度と比較すると、小中学校ともに「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりできた」と回答した児童生徒の割合（エ）、「自分の考えがうまく伝わるよ

う、資料や話の組立てなどを工夫して発表している」と回答した児童生徒の割合が、令和 3 年度と比較して増加した（オ）。

③課題

令和 3 年度と比較すると、小中学校ともに全国学力・学習状況調査の「思考力・判断力・表現力」を問う問題について、正答率は全国との差が広がった（ア）。また、算数・数学の記述式問題の正答率も全国との差が広がった（ウ）。

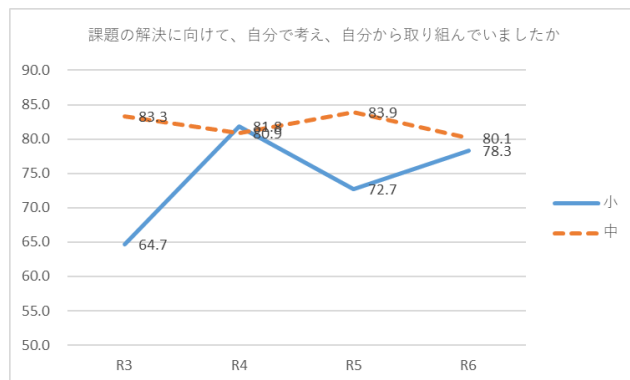
④小括

「思考力・判断力・表現力等の育成」については、各校の授業工夫により、話し合ったり、工夫して発表したりする学習場面は増加した。一方、記述式問題の正答率の減少は大きな課題である。第 2 期では、児童生徒の記述力、説明力を向上すべく、各校の実態に応じた取組を推進する必要がある。

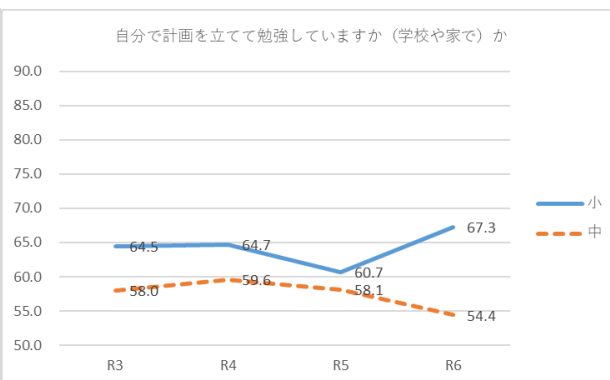
（3）「学びに向かう力・人間性等の涵養」について

①経年変化

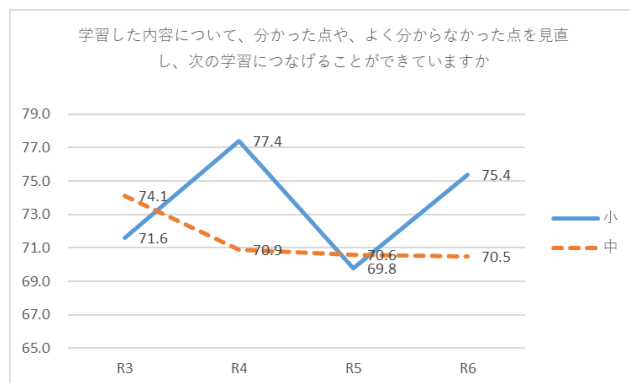
ア 課題解決に向けて、自分から取り組む



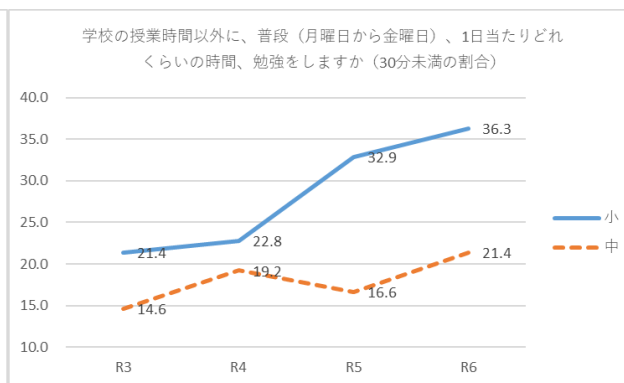
イ 自分で計画を立てて勉強する



ウ わかった点、わからなかった点を見直す



エ 家庭学習 30 分未満の割合



②成果

令和 3 年度と比較すると、小学校において「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ」と回答した児童の割合が増加した(ア)。また、「自分で計画を立てて勉強する(イ)」、「分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができた(ウ)」と回答した児童の割合も増加した。

③課題

令和 3 年度と比較すると、中学校において「課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ」と回答した生徒の割合が減少した(ア)。また、「自分で計画を立てて勉強する(イ)」、「分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができた(ウ)」と回答した生徒の割合も減少した。

令和 3 年度と比較すると、小中学校ともに「家庭学習時間 30 分未満」の児童生徒の割合が増加した(エ)。

④小括

「学びに向かう力・人間性等の涵養」については、各小学校において、単元計画を立てる学習活動を取り入れるなど、児童が主体的に取り組む学習場面が増加した結果、上記の成果につながったと考えられる。一方、各中学校では、生徒が主体的に取り組む学習場面の充実が強く求められる。

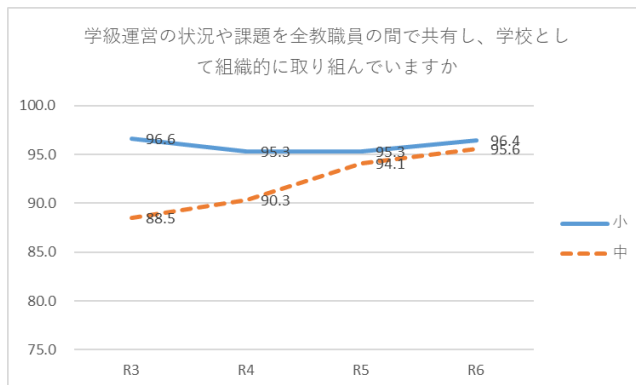
さらに、小中学校ともに「家庭学習時間30分未満」の割合は、全国と比較しても高い水準であり、大きな課題である。第 2 期では、小中学校ともに、例えば AI 型ドリルの活用促進を図り、児童生徒の学習意欲を高める取組などが必要である。

また、児童生徒の学習意欲を高めるには、各家庭での関わりも重要であることから、保護者への啓発の充実も必要である。

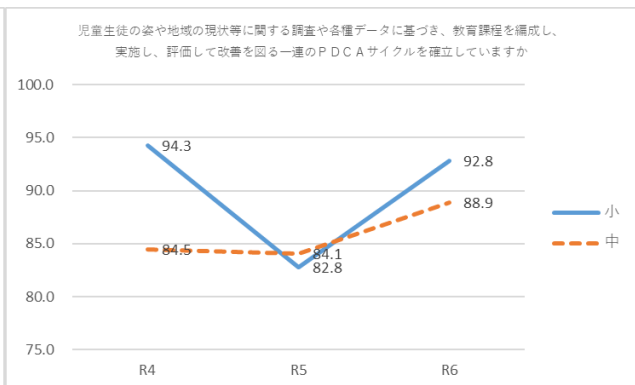
(4) 学校づくり

① 経年変化

ア 課題を全教職員で共有し組織的に取り組む



イ データに基づく PDCA サイクル



② 成果

令和3年度と比較すると、中学校において「学級運営の状況や課題を全教職員の間で共有し、学校として組織的に取り組んでいる」と回答した教職員の割合が増加した（ア）。また、令和4年度との比較において、小中学校ともに「児童生徒の姿や地域等に関する調査や各種データに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルが確立している」と回答した教職員の割合も高い水準である（イ）。

③ 課題

指標においては高い水準にあるものの、学力ヒアリングにおいては、組織的な一体感のある取組には課題意識を感じている学校があった。

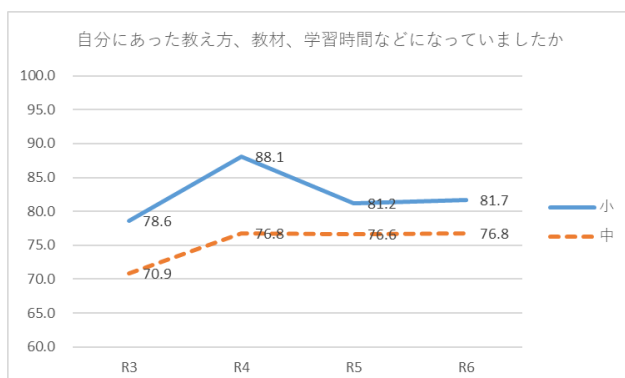
④ 小括

「学校づくり」に関する組織的な取組に対し、教職員は高い意識をもって取り組んでおり、本市の強みである。第2期では、「PDCAサイクル」の見直しを図り、より一層、各校のカリキュラム・マネジメントを推進する必要がある。

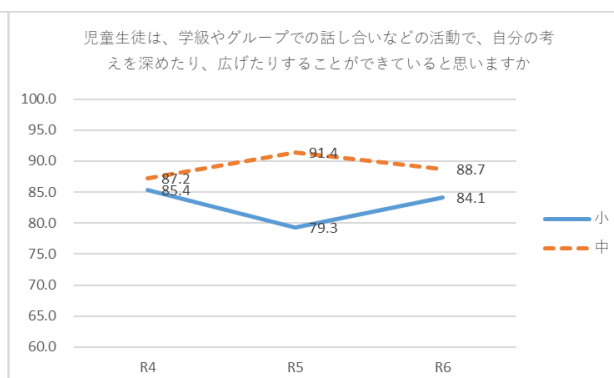
(5) 個別最適な学びと協働的な学びの実現

①経年変化

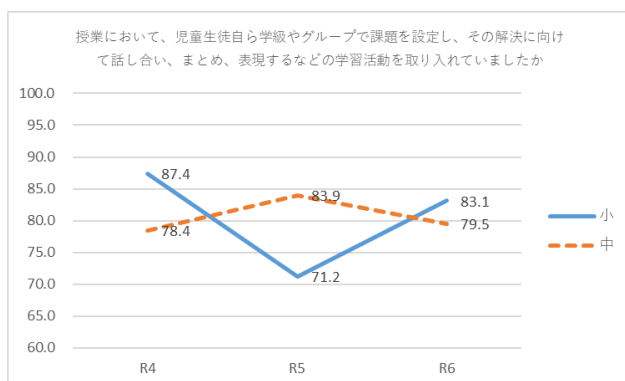
ア 自分に合った教え方、教材、学習時間



イ 自分の考えを深めたり、広げたりできている



ウ 話し合い、まとめ、表現活動を取り入れた



②成果

小中学校においてすべての指標が高い水準で推移している。(ア)(イ)(ウ)

③課題

指標においては高い水準にあるものの、各校の授業観察においては、学習に参加できていない児童生徒の姿も見られた。また、ICTを活用した「共同作業」や「共同編集」の場面においても、活動に参加できていない児童生徒の姿が見られた。

④小括

第1期においては「個別最適な学びと協働的な学びの実現」に向け、ICT機器を活用した授業づくりが推進され、魅力的な授業が見られるようになった。児童生徒も授業を楽しみ、学校を楽しみと回答した割合も高く、児童生徒の自己肯定感が高い水準を維持できていることが分かる。第2期では、学習に参加しにくい児童生徒など、授業中に気になる児童生徒への支援を充実させることで、「ユニバーサルデザイン」「インクルーシブ」の視点からの授業づくりを推進していく。

2 第 1 期の総括

「思考力・判断力・表現力等」の指標において、全国学力・学習調査記述式設問（国語）で、小学校が目標値を達成した背景には、各小学校において、国語科や言語活動の充実に係る校内研究がすすめられたことが主たる要因と考えられる。

「学校づくり」の指標において、特に中学校で大きな改善が見られた背景には、各中学校で取組の焦点化がなされたことが主たる要因と考えられ、各中学校区では「めざす子ども像」や学力向上の取組が共有され、小中連携が活発に行われるようになった。

また、成果が見られた学校の特徴として以下の 4 点が挙げられる。

- ①校内研究の研究テーマの焦点化がされている
- ②研究テーマについて職員全体が実践レベルで理解しながら、全員で実践している
- ③指導と評価が一体化した実践と振り返りが、日々行われている
- ④子どもにどんな力が身に付けばよいか指導者が理解して、子どもが 1 単位時間で「わかった」「できた」という達成感・成就感のある実践がある。

上記は、本市が各校の好事例を収集した「確かな学びを育む学校づくりスタンダード」や「四條畷市授業づくりスタンダード」が示す内容と相違ない取組である。

さらに、令和 6 年度全国学力・学習状況調査の質問紙項目「自分には、よいところがあると思いますか」の質問については、小中学校ともに肯定的回答割合が上昇傾向にあり、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の肯定的回答割合も小中学校とも全国結果を上回っている。子どもと教職員の関わりは、本市の学校教育の強みであるとする。

これらの成果を踏まえ、以下の通り、現時点の課題を再整理する。

【児童生徒の状況】

- 学力低位層の増加
- 家庭学習時間の減少
- 記述式問題の正答率の低下

【学校の取組】

- 「学びに向かう力・人間性等」の取組の見直し
- カリキュラムオーバーロードへの組織的見直し
- 教職員の授業改善及び指導力向上の取組の見直し

【教職員の資質・能力の向上】

- 子どもの困り感や躓きに気づく力
- 「学びの個性化」を支える「指導の個別化」を実現する授業力
- 通常の学級における支援教育の視点から板書計画を含めた授業力

【教育委員会の施策】

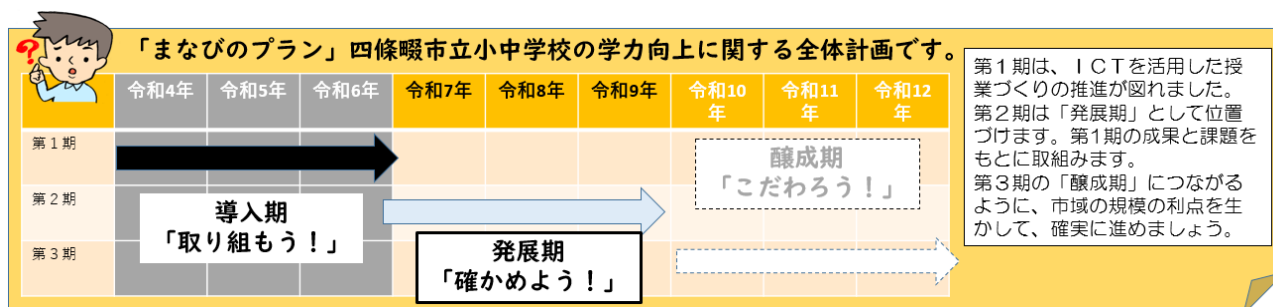
- AI 型ドリルの活用促進のための施策
- 教科横断的な学びの実現や探究的な学びの推進（カリキュラム・マネジメント）
- 地域、保護者への啓発・情報の発信

上記課題の解消に向けた第 2 期の取組を推進するべく、取組の焦点化と指標の見直しを図った。

3 第2期の取組について

(1) 発展期

令和7年度からの3年間を「発展期」と位置づける。



(2) 『目標に基づく施策』の充実

第4章「目標に基づく施策」に基づき、3つの取組の更なる推進のため、第2期の学校ならびに市教委の重点的な取組は以下とする。

①組織的な取組の推進

『確かな学びを育む学校づくり』スタンダードに基づく学力向上の推進

- 学校 探究活動の充実（教科横断的なカリキュラム・マネジメント）
- 学校 エビデンスベースの学校づくり（PDCA サイクルの見直し）
- 市教委 四條畷市教育フォーラムを実施（SWPBS の普及）



ポジティブ行動支援（PBS）

学校、先生方の「子どもにこんな姿になってほしい」、また、子どもたち自身の「こんな姿になりたい」を実現するための枠組みがポジティブ行動支援（PBS）です。PBS では、これらの願い、期待を抽象的なままにしておくのではなく、現実のものとするために「具体的に行動レベルで何ができるか？」を考えて目標行動を設定し、この目標行動を子どもができるように支援していきます。（「学校全体で取り組むポジティブ行動支援スタートガイド（ジアース教育新社）」より引用）

学校規模のポジティブ行動支援（SWPBS）

PBS を学校全体で組織的に行うのが SWPBS（学校規模のポジティブ行動支援）をです。

SWPBS に取り組むための要素は「実践」「システム」「データ」「成果」の4つです。

これらの要素を学校づくりに活かしていくことを「エビデンスベースの学校づくり」と呼び、四條畷市で3年間取り組んでいきます。

② 子どもが学びの主体になる授業づくり

「四條畷市 授業づくりスタンダード」に基づく授業改善

○学校 個別最適な学びと協働的な学びの充実

●市教委 探究活動ワーキング、研修会の実施

プロジェクトチームからワーキンググループへ

第2期は、研修を見直します。「ワーキング」では、先生方が学習者になり、「探究的な活動」を経験します。「プロジェクト」から「ワーキング」に形式を変更することで、必然的に参加される先生たちの主体性が発揮され、深い学びとなることが期待されます。合わせて、教職員のスキルアップ、指導力向上をめざします。児童生徒に指導する教職員こそ「探究的な学び」を経験しなければなりません。



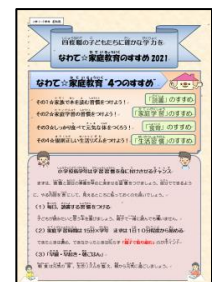
③ 家庭での教育力の向上、生活習慣の改善

「なわて☆家庭教育のすすめ」による保護者への発信・啓発

○学校 AI型ドリルを活用した家庭学習の習慣化

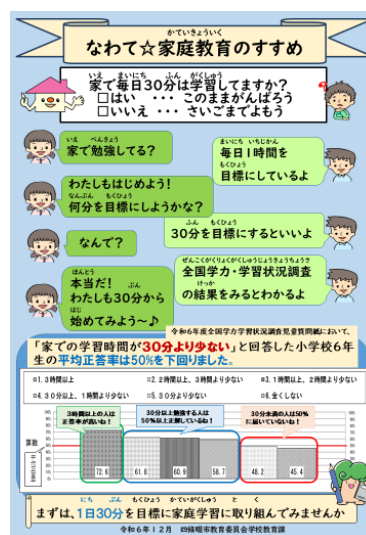
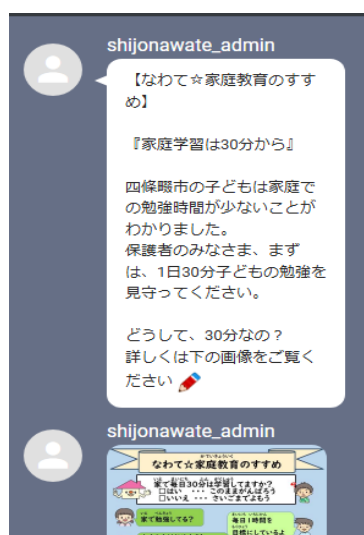
●市教委 「なわて☆家庭教育のすすめ」による保護者への啓発

●市教委 家庭学習ワーキングの実施



「なわて☆家庭教育のすすめ」

第2期は、家庭教育に関する情報を市のHP、公式SNS等を活用し積極的に発信します。市域全体の家庭教育への関心を高めるとともに、家庭学習に関する保護者の関わり方を具体的に示すことで、楽しみながらできる家庭教育の推進を図ります。



(3) 取組の柱

『1つの習慣化と2つの充実』を柱として具体的な取組を推進する。

○1つの習慣化・・・家庭学習の習慣化

○2つの充実・・・探究的活動の充実 と 個別最適な学びと協働的な学びの充実

	家庭学習の習慣化	探究活動の充実	個別最適な学びと協働的な学びの充実
各学校	○家庭学習30分未満の児童生徒を減少させる取組を推進	○教科横断的な視点からのカリキュラム・マネジメントを推進	○児童生徒にとって「魅力ある授業づくり」を推進
先生	○主体性を伸ばす宿題・課題の工夫	○日々の授業で「めあて」を工夫	○学習参加が困難な児童生徒への手立てを工夫
教育委員会	○家庭学習ワーキンググループによるタブレットを活用した学びの研究	○探究活動ワーキンググループによる研究・普及	○授業づくりへの指導助言 ○学識・講師の派遣
学校と市教委の連携	○すべての学校で「ポジティブ行動支援」によるエビデンスベースの魅力ある学校づくりを推進。市教委は、児童生徒教職員アンケートの効果的活用を研究。		

各学校は、これまで取り組んできた特色ある取組を継続しつつ、エビデンスベースの学校づくりに努め、教育委員会は、経験年数の短い教職員が年々増加する中において、先生方の授業スキルを向上させるべく、適切な指導助言を行い、必要な研修を実施する。

(4) 第2期3年間の重点目標指標

本計画の第2期（令和7年度から令和9年度の3年間）は前項（2）にあげた具体的な取組を行った結果としてめざす達成目標を以下とする。

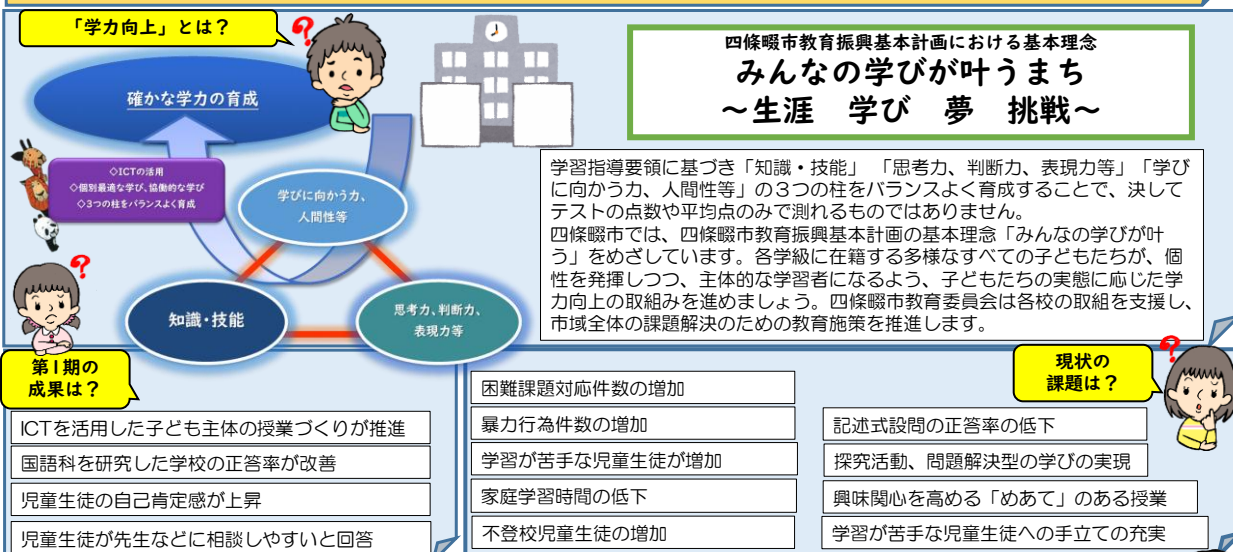
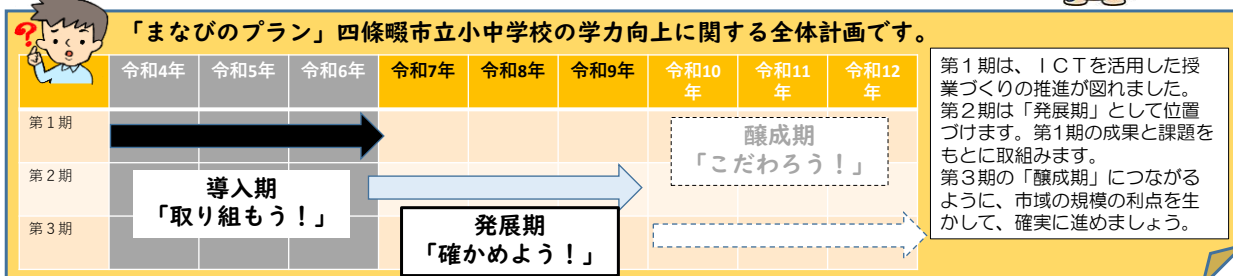
	調査方法	現状 R6.12	目標 R9.12	関連する指標
学校に行くのは楽しいと思う（％）	全国学調	小79.1 中80.7	小84.8 中83.8	○先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか
不登校者児童生徒数の千人率（％）	問行等調査	小20.4 中91.8	小21.4 中67.1	○新規不登校者数 ○暴力行為発生件数
教職員の高ストレス判定者（％）	ストレスチェック	15.5	11.5	○時間外在校等時間 ○欠員数
標準学力検査5段階評定1、2の割合（％）	標準学力検査	小40.5 中41.5	小21.0 中21.0	○家庭学習30分未満の割合
すべての児童生徒が参加・理解できるよう学習中に支援している。（肯定的回答％）	教職員アンケート	R6末 R6末	未定 未定	○ICT機器を活用することで学習が楽しくなりましたか
総合的な学習の時間では、課題を立て、整理して、調べてことを発表する活動に取り組んだ	全国学調	小73.0 中80.1	小80.0 中85.0	○四條畷市の課題を理解し、正対した取組の充実に向けて学校全体で取り組んでいる。

まなびのプラン（2期）

概要版



「まなびのプラン」とは？



まなびのプラン（2期）は「1つの習慣化と2つの充実」を実現しよう！

	家庭学習の習慣化	探究活動の充実	個別最適な学びと協働的な学びの充実		
各学校	○家庭学習30分未満の児童生徒を減少させる取組みを推進	○教科横断的な視点からのカリキュラム・マネジメントを推進	○児童生徒にとって「魅力ある授業づくり」を推進		
先生	○主体性を伸ばす宿題・課題の工夫	○日々の授業で「めあて」を工夫、惹きつける課題の設定	○学習参加が困難な児童生徒への手立てを工夫		
教育委員会	○家庭学習ワーキンググループによるタブレットを活用した学びの研究	○探究活動ワーキンググループによる研究・普及	○授業づくりへの指導助言 ○学識・講師の派遣		
学校と市教委の連携	○すべての学校で「ポジティブ行動支援」によるエビデンスベースの魅力ある学校づくりを推進。市教委は、児童生徒教職員アンケートの効果的活用を研究				
3年後の目標は？		調査方法	現状 R6.12	目標 R9.12	関連する指標
学校に行くのは楽しいと思う（％）		全国学調	小79.1 中80.7	小84.8 中83.8	○先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか
不登校者児童生徒数の千人率（％）		問行等調査	小20.4 中91.8	小21.4 中67.1	○新規不登校者数 ○暴力行為発生件数
教職員の高ストレス判定者（％）		ストレスチェック	15.5	11.5	○時間外在校等時間 ○欠員数
標準学力検査5段階判定1、2の割合（％）		標準学力検査	小40.5 中41.5	小21.0 中21.0	○家庭学習30分未満の割合
すべての児童生徒が参加・理解できるよう学習中に支援している。（肯定的回答％）		教職員アンケート	R6末 R6末	未定 未定	○ICT機器を活用することで学習が楽しくなりましたか
総合的な学習の時間では、課題を立て、整理して、調べてことを発表する活動に取り組んだ		全国学調	小73.0 中80.1	小80.0 中85.0	○四條畷市の課題を理解し、正対した取組の充実に向けて学校全体で取り組んでいる。

四條畷市ポジティブ行動支援アドバイザー（仮）

庭山 和貴（にわやまかずき）先生（所属）大阪教育大学 総合教育系高度教職開発部門 准教授



令和7年3月
四條畷市教育委員会



まなびのプラン (R4～R9)															作成日令和7年3月6日				
指標																			
				第1期				第2期				参考値							
		項目	データ	対象	R3	R4	R5	R6	R6目標	到達度	R7目標	R8目標	R9目標	参考値 (R6末)					
知識・技能	1	R7新設	授業で学んだことを、次の学習や他の教科の学習で役立てている。 (R6参考値 授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか)	実行度	小4～小6	*	*	80.4	*	*	82.0	83.5	85.0	85.0	全国R6_83.7				
		R7新設		実行度	中1～中3	*	*	78.8	*	*	80.0	81.0	82.0	82.0	全国R6_79.0				
	2	R7新設	全国学力・学習状況調査 標準化得点 (小学校・中学校 国語) 市/国	成果	小6	97	97	98	95	*	98.0	99.0	100.0	100.0	全国比 1				
		R7新設		成果	中3	98	97	98	98	*	98.0	99.0	100.0	100.0	全国比 1				
	3	R7新設	全国学力・学習状況調査 標準化得点 (小学校・中学校 算数・数 学) 市/国	成果	小6	98	98	97	97	*	98.0	99.0	100.0	100.0	全国比 1				
		R7新設		成果	中3	98	98	98	97	*	98.0	99.0	100.0	100.0	全国比 1				
思考力・判断 力・表現力	4	R7新設	児童生徒に互いの意見・考え方や、作品などを共有させたり、比較検討させたりするために、コンピュータや提示装置などを活用して児童生徒の意見などを効果的に提示していますか。	実行度	教職員	*	76.5	65.6	84.2	*	85.0	86.0	87.0	87.0	アングレR6_84.2				
		R7新設		実行度	教職員	*	67.3	70.3	70.0	*	71.0	72.0	73.0	73.0	アングレR6_70				
	5	継続	全国学力・学習状況調査 (問題形式別平均正答率「記述式」の正 答率) の全国平均正答率を1とした時の割合 国語	成果	小6	86.8	89.7	87.3	87.6	95.0	0.92	90.0	95.0	100.0	全国比 1				
		継続		成果	中3	91.4	82.4	97.5	81.8	97.0	0.84	85.0	90.0	95.0	全国比 1				
	6	継続	全国学力・学習状況調査 (問題形式別平均正答率「記述式」の正 答率) の全国平均正答率を1とした時の割合 算数・数学	成果	小6	85.3	91.2	79.5	81.8	95.0	0.86	85.0	90.0	95.0	全国比 1				
		継続		成果	中3	93.1	80.9	89.7	72.0	97.0	0.74	75.0	85.0	90.0	全国比 1				
学びに向かう 力・人間性等	7	R7新設	ICT機器を活用することで、進んで学習するようにしましたか。	実行度	小4～小6	75.0	74.4	70.1	71.2	*	72.0	75.0	78.0	78.0	アングレR6_71.2				
		R7新設		実行度	中1～中3	72.4	58.5	57.0	55.6	*	56.0	60.0	64.0	64.0	アングレR6_55.6				
		継続	学校の授業時間以外に、書読 (月曜日から金曜日)・1日当たりどれく らいの時間、勉強をしますが (30分未満の割合)	成果	小6	21.4	22.8	32.9	36.3	13.0	30.0	24.0	18.3	18.3	全国R6_18.3				
	8	継続		成果	中3	14.6	19.2	16.6	21.4	9.0	20.0	18.5	17.0	17.0	全国R6_17.0				
	9	R7新設	各種テスト等の結果から、子どもたちの学習状況を把握し、学校の取組みの検 証を行ったうえで決定した改善策について、自分自身も具体の取組みを進める ことができる (【強肯定】)	実行度	教職員	*	*	44.1	*	*	46.0	48.0	50.0	50.0	アングレR6_44.1				
		R7新設		実行度	教職員	*	*	40.4	*	*	42.0	44.0	46.0	46.0	アングレR6_40.4				
個別最適な学び	10	R7新設	四條緑体の課題を理解し、それに正対した取組みの充実にむけて 学校全体を取り組んでいる。【強肯定】	成果	教職員	*	*	52.0	*	*	55.0	60.0	65.0	65.0	アングレR6_52.0				
		R7新設		成果	教職員	*	*	39.0	*	*	42.0	47.0	52.0	52.0	アングレR6_39.0				
	11	R7新設	児童生徒が互いの考えを交換して話し合いなどができるように、コン ピュータやソフトウェアなどを活用することを指導していますか。	実行度	教職員	*	61.7	49.3	61.0	*	62.0	64.0	66.0	66.0	アングレR6_61.0				
		R7新設		実行度	教職員	*	66.7	54.3	65.6	*	66.0	68.0	70.0	70.0	アングレR6_65.6				
	12	R7新設	学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用して、自分のペー スで理解しながら学習を進めることができる	成果	小6	*	*	76.5	*	*	77.0	80.0	85.5	85.5	全国R6_85.5				
		R7新設		成果	中3	*	*	73.1	*	*	75.0	78.0	80.2	80.2	全国R6_80.2				
協働的な学び	13	R7新設	児童生徒が、グループで話し合ったり考えたり、協力してレポート・資 料・作品などを制作したりするなどの学習の際に、コンピュータやソフト ウェアなどを効果的に活用させていますか。	実行度	小4～小6	*	60.3	52.6	64.6	*	64.0	66.0	68.0	68.0	アングレR6_64.6				
		R7新設		実行度	中1～中3	*	53.2	58.1	65.5	*	66.0	68.0	70.0	70.0	アングレR6_65.5				
		R7新設		成果	小6	*	*	84.0	*	*	85.0	86.0	88.0	88.0	全国R6_87.1				
	14	R7新設	学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用して、友達と協力しな がら学習を進めることができる	成果	中3	*	*	*	85.5	*	86.0	87.0	88.0	88.0	全国R6_85.2				
まなびのプラン第2期 (R7～R9) 重点指標																			
項目				R7新設															
		学校に行くのは楽しいと思う	データ	対象	R3	R4	R5	R6	R6目標	到達度	R7目標	R8目標	R9目標	参考値 (R6末)					
2期重点	15	R7新設	成果	小6	80.6	82.9	78.8	79.1	*	*	81.0	83.0	84.8	84.8	全国R6_84.8				
		R7新設	成果	中3	76.0	76.2	72.5	80.7	*	*	81.0	82.0	83.8	83.8	全国R6_83.8				
	16	R7新設	成果	児童生徒	15.4	26.7	20.4	R6末	*	*	20.0	20.0	20.0	20.0	全国R5_21.4				
		R7新設	成果	児童生徒	64.1	71.1	91.8	R6末	*	*	80.0	75.0	70.0	70.0	全国R5_67.1				
	17	R7新設	成果	教職員	19.7	17.6	14.1	15.5	*	*	14.0	13.0	11.5	11.5	全国R6_11.0				
		R7新設	成果	小3、小4	33.9	36.2	40.7	40.5	*	*	40.0	35.0	30.0	30.0	統計学的に21%				
2期重点	18	R7新設	標準学力検査 5段階評定1、2の割合 (学力低位層) (小学校のR3～R6は参考値: 小4～小6結果より)	成果	中1～中3	35.6	38.6	37.3	41.5	30.0	40.0	35.0	30.0	30.0	統計学的に21%				
		継続		実行度	教職員	*	*	51.0	*	*	55.0	60.0	65.0	65.0	アングレR6_51.0				
	19	R7新設	すべての児童生徒が学習に参加し、理解できるよう、学習中の手 立てや支援を行いましたか(強肯定)	実行度	教職員	*	*	*	36.0	*	40.0	45.0	50.0	50.0	アングレR6_36.0				
		R7新設	総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理し て、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組む	実行度	小6	59.7	59.1	73.0	*	*	75.0	77.5	80.0	80.0	全国R6_81.3				
			実行度	中3	65.1	58.3	72.3	80.1	*	*	80.0	82.5	85.0	85.0	全国R6_82.2				